お寺と NPO のパートナーシップの可能性を探って

浄土宗宗祖法然上人 800 年大遠忌事務局長

光成 範道

一般社団法人社会的認証開発機構専務理事・事務局長

平尾 剛之

光成範道（みつなり はんどう）

浄土宗宗祖法然上人 800 年大遠忌事務局長。1946 年金沢市生まれ。法船寺、弘願院住職。浄土宗宗議会議員。財団法人浄土宗報恩明照会事務局長、浄土宗宗議会運営委員会委員長、浄土宗総長公室長を経て、2008 年 5 月より現職。

平尾剛之（ひらお たかゆき）

一般社団法人社会的認証開発機構専務理事・事務局長（CEO）・研究主幹。きょうと NPO センター事務局長（現フェロー）を経て、2011 年 2 月に京都発全国初の非営利セクターを対象とした評価・認証システム、コンサル等を担う一般財団法人社会的認証開発推進期以降を設立し、活動している。

共生・地域文化大賞シンポを振り返り

司会 浄土宗法然上人 800 年大遠忌の一環として実施された共生・地域文化大賞特別企画シンポジウム（6 月 11 日）が開かれ、授業の一環として院生の皆さんに参加してもらいました。今日の討論は、事後学習会ということになります。今日、講師の一人である平尾剛之さんは、このコースの修了生ですが、浄土宗が主催しています共生・地域文化大賞の運営事務局長です。平尾さんに無理を言って、法然上人 800 年大遠忌事務局長をなさっている光成範道先生にも来ていただきました。

事後学習会としては異色のかたちですが、「NPO とお寺の連携や協働のもつ現代的な意味」について一緒に考えてみたいと思いま

す。まずお 2 人からお話をいただきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

平尾 皆様、シンポジウムに来ていただいて、今日はその振り返りということですが、私は 2006 年の経済学研究科のコースの修了生です。今は、一般財団法人社会的認証開発推進機構の事務局長をしておりますが、今日のテーマでは、共生・地域文化大賞の運営事務局長をさせていただいている関係から、京都 NPO センターのフェローという立場で来ています。

日本の仏教史概観

私が浄土宗の説明をするのは恐縮なのですが、歴史の勉強をしながら導入をさせていただきたいと思います。仏教伝来は 538 年です。仏教を日本に導入しようとした蘇我氏

と、もともと神道を守っていききたい物部氏が対立して、蘇我氏が勝つわけです。聖徳太子が推古天皇の摂政をして仏教を厚く信仰する。

日本の仏教は飛鳥時代の538年に南都6宗が伝来してからであり、平安時代に桓武天皇以降、いわゆる平安2宗として天台宗と真言宗があり、最澄が766年、空海が774年から中国に行き、経典を学んで日本にもって帰ってきて、平安の仏教を広めるという流れをつくるわけです。

そのあとに天台宗から分かれて、日蓮の浄土宗ができます。浄土宗の開祖である法然上人は、1133年から1212年まで生きられたということですね。それから40年ほどたって、浄土真宗本願寺派の開祖である親鸞聖人が生まれておられるということです。歴史的には、桓武天皇が「なくよウグイス平安京」とか、そのあとに平家が勢力を握って、壇ノ浦の戦いで滅亡した後、われわれの時代には1192年から鎌倉幕府だといわれていたのですが、実は鎌倉に幕府をおいた源頼朝が守護・地頭権を置いたのと、東国に支配権を置いたのとどちらかが鎌倉幕府のはじめだということで、征夷大將軍になったときではなくて、今は、1183年や1185年といわれています。

なぜ、鎌倉幕府を言いたいかといいますと、平安の後期に法然上人がお生まれになって、鎌倉仏教から今のほぼ日本の宗教の体制が整ってくる。宗教の流れはこんな感じですが、映画にもなりました「ZEN」の道元も、1200年ごろ生まれて、禅宗を広めたという時代背景がある。

法然上人は1175年、43歳で浄土宗を立宗されます。比叡山から下りられて、今の知恩院があるところを吉水というらしいのです

が、その吉水の地で庵を構え、「ただひたすらに南無阿弥陀仏とお念仏を唱えなさい。そうすれば命終わる時、阿弥陀仏の来迎をいただき、極楽浄土に生まれることができる」と、念仏にある万人平等救済を唱えられたということです。

親鸞聖人は法然上人のお弟子さんで、浄土真宗は親鸞聖人が亡くなられてからお弟子さんが開かれた宗派であるということです。そして、法然上人の没後800年が今年だということです。

この辺から、光成局長にお話をお戻しさせていただきます。

今われわれが浄土宗というのは、宗教法人浄土宗のことで、知恩院や、篤姫が信仰された増上寺とかいうのは、すべて宗教法人でわかれています。明治29年に民法第34条ができ、公益法人法のなかの特別法に宗教法人というのは認証されています。特定非営利活動法人と一緒ですね。各お寺は宗教法人として分かっているんです。宗教法人浄土宗のなかに知恩院があったり、増上寺があったり、百万遍の知恩寺、黒谷山、光明寺があるわけではなくて、すべてのお寺は一つ一つの宗教法人にわかれています。

分かれている中で、浄土宗として、人材育成や実務的な取りまとめということをされています。いわゆる浄土宗というのは、全国の教区からいろんな方が来て、国会のような制度があります。議員さんが出られて、選挙があり、宗務総長が浄土宗ではトップです。しかし、これは宗教上のトップではないです。トップは総本山知恩院の伊藤唯真御門主です。浄土宗の宗務総長は里見法雄さんですが、この方は国会みたいな選挙で選ばれたトップということです。

100 年前からつづく社会福祉事業のながれ

光成 仏教史の時間が終わりましたので(笑)、続けてお話をさせていただきます。浄土宗というのは包括法人という立場です。7000ヶ寺の宗務行政を扱うところが浄土宗宗務庁で、浄土真宗本願寺派、お西さん、お東さんは一宗派に対して本山がひとつです。宗本がひとつになっている。お西さんは、最近変えられたみたいですが、浄土宗は総本山が知恩院、大本山が7つ全国にあります。そのほかに7000近くのお寺があります。宗務庁は役所なんです。

そのなかで800年遠忌記念事業、お西さん、お東さんは750年の親鸞聖人の遠忌の記念事業をされています。50年ごとに、ご遠忌がありまして、最近では昭和36年が750年、明治44年が700年というご遠忌の年でした。

700年のご遠忌を記念しまして、大正3年に終わったのですが、浄土宗報恩明照会という財団法人があるのですが、法然上人が名照大師という大師号をもらった記念で作った財団法人です。これが戦争前あたりまで浄土宗が社会事業宗といわれていた時代があります。今でも社会福祉事業をやっている団体が100ほどありますが、その母体が浄土宗報恩明照会という財団法人です。この浄土宗報恩明照会の1事業というキャッチフレーズで大正から昭和初期にかけて、社会事業ならびに今のNPO法人活動のようなものがありました。

浄土宗のお寺が母体の保育園、幼稚園がありますが、浄土宗報恩明照会が奨励をした、1寺に1事業という流れで代表的なのは、三条の壇王法林寺、あそこは古いです。あのようにならずと経営してやっている。地方に行き

ますと、ずっと大規模に社会事業を展開しているところもあります。それから京都では、老人いこいの家です。京都市の各区にありますが、そういう流れといえますか、そのような寺院が浄土宗では結構ありました。浄土宗報恩明照会の流れを見ながら、そういう伝統が宗派にはありました。

共生・地域文化大賞のいきさつ

2001年には水谷幸正という佛教大学の元学長で、理事長を今でもやっている方が宗務総長をされました。その2001年に浄土宗21世紀劈頭宣言をつくって、世界にアピールしようという宣言をしました。「愚者の自覚を、家庭にみ仏の光を、社会に慈しみを、世界に共生を」という4つのフレーズでこのような宣言をアピールしました。

これをもとに浄土宗の基本構想を策定しようとい何年か会議があり、中間報告、基本構想の報告書を小さい冊子ですが作成し、意見集約をして、基本構想をつくりました。それが2003～2005年です。それと平行して、いわゆる800年大遠忌記念事業を考え、策定し、進めていこうということで、ベースとしては4つのフレーズです。当時、東西の本願寺さんと共同の事業もやろうということで、3つ、4つ含まれておりました。最初は46の事業名が挙がっておりました。800年大遠忌中央委員会、これは30人の委員会で、集まるのも大変、会議をしても大変集約するのが難しいというようなそういう状況でしたが、3、4年推移をしてきました。

事業名、事業科目が整理され、平成17、18年ごろ、それが推進委員会となり、今は中央実行委員会となっていますが、その中央委員会の小委員会を作り、事業の洗い出しを

してきて、41 事業になりました。それから平成 18 年くらいに総合プロデューサーに愛知万博の総合プロデュースをした福井昌平さん、奈良遷都 1300 年の事業にもプロデュースをなさった方ですが、うちの事業も見てください。それを 7 つの事業群にわけ、26 の事業に整理をしていきました。その中で、芸能・演劇に関する委員会や学術的な委員会、教師養成の委員会など各専門委員会がいくつかできました。

その中で、社会貢献の委員会というものがありません。大阪・應徳院の秋田光彦さんと私もその委員会に入っていました。当初は映画を作る、文学賞を作るなどの話がありましたが、委員会の中で、「そんなことしたって…」という感じでした。そういうときに最終的な案として出てきたのが、地域文化、あるいは地域おこしをする文化賞的なものを作ってはどうかということで話がもちあがり、共生・地域文化大賞の骨子ができてきました。

秋田光彦さんはご自身のお寺で活動をいろいろやっている。大阪の應徳院といったら、結構有名な場所です。その方法論として NPO、ボランティア、彼が考え出した会員制度のお寺、そういう発想の下にこの共生・地域文化大賞が展開されていくのです。

「法然共生」というロゴがあります。宗祖法然上人 800 年大遠忌というメッセージシンボル、21 世紀劈頭宣言の集約したものというかたちでこのシンボルマークをつくって、これをメッセージ化、簡略化されたものを旗印に、この地域文化大賞をつくることにしました。

浄土宗の思いを全面に

では運営をどうするか。宗派や宗務庁で、あるいは他のところで文化賞あるいは NPO・ボランティア活動に関して、運営というノウハウがまったくありませんでした。そこで秋田さんに京都 NPO センターを紹介していただいて、運営に関して話し合いをしました。

運営に関しては浄土宗が前面に出ています。これは平尾さん、当時深尾さんとも話をしました。彼らは、浄土宗を前面に出すべきだ、社会にアピールするということと、その賞に対する思いを前面に出すべきだと。そこで、浄土宗を前に出し、偏見や変な目で見られることもなく、この大賞は 4 回を終え、今年 5 回になったのです。

「普通、宗教教団がこういう賞の運営について話をもちかけるのは、電通や博報堂などの広告代理店などが普通でしょう。それをなぜ NPO センターなのですか」ということをよく言われるのですが、これは運営委員会をやっている秋田光彦さんの考え、判断で、京都 NPO センターとご縁が結ばれました。

今回が最後で 5 回目ですが、先日のシンポジウムは、自死自殺防止というテーマを選び、シンポジウムを開催いたしました。いくつか回を重ねる間に、子育て支援や地域おこしとか、いろいろなものがあります。それもお寺と NPO との協働です。

宗祖法然上人は知恩院で小さな庵を結びました。そこで一般の方に話します。そのときは檀信徒なんていう人ではなく、ただ、「仏教の教えを説いているおじさんがいる」という感じです。それを周りでいろいろな人が聞いている。

小説の話になりますが、縁の下に皇族や陰陽師たちが寝転がって法然上人の話の聞いていて、後に信仰の道にはいったという話も伝わっております。法然上人はたくさんの信心を集めて、大説教をしているというわけではなくて、一対一の話なことで、こういう悩みに関しては、仏さんはこうですよ、お念仏はこうなんですよ、というところからはじめられた。

「対話と交流」。いうなれば、お寺が成り立った最初のスタイルをわれわれもまず始めるべきではないかということで、最初のお相手が京都 NPO センターと協働すると。そこでわれわれと一緒にやっていることを周りの方々に聞いていただいて、そして、興味を持っていただいて、参加をしていただくというスタイルが定着すれば、お寺と NPO、あるいはボランティア活動との協働のスタイルというものが出てくる。そういう考えでシンポジウムを 6 月 11 日に開催させていただきました。

平尾 ですから、大遠忌の記念事業の一環のなかに共生・地域文化大賞があった。光成局長からお話があったように、中途半端に NPO 法人をつくって、共生・地域文化大賞運営事務局みたいなことをつくったのではなくて、きちっと浄土宗が前面にでたということがわれわれの運営上においても、社会的インパクトなどにおいてもよかったのではないのでしょうか。

私自身はその事業が設計段階にはいなかったんです。設計段階には某新聞に居ました。深尾さんから電話がかかってきて、「平尾さん、ええのありましたよ、ぜひ来てください」と。「何やねん」「浄土宗ですわ」「ようわからへんけど辞めていくわ」ということで関わるようになったわけです。この共生・

地域文化大賞を中心に運営してくださいといわれて、「わかりました」と。

NPO とお寺の協働？

1 年目、2 年目は、いわゆる賞の体系としては、一般の NPO を表彰する部分と、NPO とお寺の協働関係を表彰する二つの部門があり、その中のどちらかでよりいいのが大賞になるのですが、1 回目、2 回目で言うと、どうしても NPO が大賞をとるという構図にしかならなかったのです。

われわれが探せば、きちっとお寺と NPO が対等な関係でバランスよく協働して、運営している事例が挙がってきて、そこを表彰できるのだと思っていたのです。しかし、それは勘違いで、出てきたのが、たとえば NPO がお寺の土地を借りて何かをしているとか、NPO の運営委員に一人お寺さんがいるのですが、これで協働になりますかとか、非常にバランスの悪い、われわれがイメージしたものと違い、あまりにいい事例が挙がってこなかったのです。

NPO との協働といえ、行政と NPO の協働といいますが、ややもすれば NPO は行政の下請けになりますよね。それはあきらかにバランスが悪いですよ。それと同じく NPO がお寺を下請けにするとまでは言わないですが、ただ場所を借りているとか、ちょっと何か話に来て参加しているとか、逆に言えば、お寺が子どもに紙芝居をするのに、紙芝居をしている NPO を呼んできてプログラムだけ使ったとか。そういうものでも表彰できますか、ということになってきたので、ちょっと違うなと感じました。

お寺と NPO がお互いにミッションを共有して、お互いの特性とか専門性を生かして社

会的課題に向き合っていくというのをイメージしていたのですが、1年目、2年目にはあがってこなかったのです。

そこで、助成金制度をつくろうと考えました。水をまいて、種をまいたら、そこから育ってくるのではないかというシナリオを考えまして、助成金制度をつくったんです。助成金制度自体はお寺が単体でやっている活動もOKです。ただ、やっぱり条件はNPOとお寺の協働なのです。協働している事例に関してでないにだめだと。そうするとNPOは相方としてお寺を一生懸命探すわけです。でも、お寺のほうがNPOを探すというアクションはおこってこない。結局、場所貸しや、声をかけるネットワークにお寺さんがいたとかのレベルで、なかなか助成で種をまいてもそんなに簡単にイメージしたようなものは出てこなかったのです。

なかにはいい取り組みがありまして、外国人の子どもたちを支援している三重県のNPO 寺子塾という、お寺さんが中心にいろんな地域の学校の先生やボランティアを巻き込んで、外国人の支援をして、そして受験を受けさせたりしている団体に3回目は助成金を出すことができたのです。そこが4回目に大賞をとってくれはったという、われわれのなかでもサクセスストーリーがあります。今回のシンポジウムに出てもらった、Live-onの尾角さんはお寺と連携して自死自殺の活動をしているので、Live-onに第3回のときに助成をトップで取ってもらったという経緯がありました。

私たちにとって、NPOとお寺が協働して社会的課題に向き合うというのが、どういう絵描きなんだろうと模索したときに、探していて待つではなく、「一回やってみたい、こういうのを私たちは求めているんです」とや

りたいなと思ってプログラミングしたのが、今回のテーマ「往く『いのち』につながる私たちのとり組み～お寺とNPOの実践から～」だったのです。これは実はダブルテーマを組んでいまして、アンダーグラウンドにNPOとお寺という協働のテーマを組んで、その上に自死自殺のテーマをのせてあります。ちょっとわかりにくいことだったんですが、お寺だけでもだめ、NPOだけでもだめ、二つが重なることで新しい可能性をひらくみたいなイメージで、今回のこのシンポジウムを組ませていただいたというのが経緯です。

共生・地域文化大賞にこめられた思い

自死自殺の問題に関するNPOの取り組み、さらに、お寺の取り組みをお聞きいただいたと思いますので、それに対する感想やご意見をぜひ出していただきたい。その後、後半はそのアンダーグラウンドにある次の可能性、NPOとお寺は自死自殺のことだけが協働のテーマではありませんので、どうやればもっとお寺とNPOが協働関係が生まれていくのか、こういう課題に対していろいろなご意見をいただいて、議論がふかまっていければいいと願っています。

司会 ありがとうございます。院生の皆さんは6月11日にシンポジウムに参加していただきましたが、このシンポジウムがどんな背景の下に企画されたものかについて、まず説明をいただきました。

共生・地域文化大賞が浄土宗にとってどういう意味をもっているのか。お話を聞いてみますと、800年前に浄土宗が生まれたとき、国家宗教、あるいは貴族を中心とした支配者

の宗教に対して、民衆の宗教として、仏教のもっている意味を大きく転換、新しい可能性の口火を切ったのが法然上人だったということ。その思いを 800 年後の今、かつての法然上人が抱かれた仏教の思い、その原点をもう一度呼び起こしながら、現代の社会における伝統仏教のルネサンスというのか、蘇生の願いが共生・地域文化大賞という中に込められているのでないかと受け取りました。

そういう位置づけの中に、5 年間で区切りで共生・地域文化大賞の活動をふまえて、皆さん方のご出席なさった講演とパネルディスカッションがあった。とくにパネルディスカッションでは自死自殺防止の問題にテーマを絞って議論がされた。この問題に取り組まれている僧侶の方々の活動と、NPO の動きがクロスオーバーしながら、自死自殺が増えているという現代的課題を通して、NPO とお寺とのパートナーシップのありかたを議論されたというのが、この前のシンポジウムであった。

いま日本の社会は年間 3 万人が自死自殺されているといわれています。この数字から日本の社会が底抜けというか、危機的状況にあることを暗示しているように思いますが、シンポジウムはそのことを敏感に感じ取られた動きの中で企画されている。おそらくこの問題は、東日本の大震災の中で、行方不明の方を含めて 3 万人近い方が海にのまれて亡くなっていますが、その方たちに対して、私たちはどのように向き合うべきかの問題ともオーバーラップしているように思います。

感想交流—自己紹介を通じて—

さて、ここからは事後学習です。当日参加されたときの印象ないしはこういうことを

感じたということ、一通り述べていただきたい。

—— NGO で活動しています。シンポジウムに参加していないのですが、今日のお話を聞いて、すごいと思いました。私は環境分野で NGO 活動をやっているのですが、どうやればお寺と協働できるか、そのあたりを話したいと思います。

—— 現在観光協会ですら仕事をしています。当日のシンポジウムで一番感銘を受けたのは、僧侶の藤沢さんが宗教の枠を超えた活動をなさっているということですね。自殺というのは 50 代、60 代の男性が圧倒的に多くて、ほとんどが金銭的な理由だったり、あとは人間関係や仕事の問題ということで、聞くだけでは解決できないところもあると思いますので、悩みを聞く、癒しを与えるといった活動に加えて、ソーシャルワーカーなどの連携も加わっていけば、NPO でもそういう活動をされているところがあると思いますので、さらに活動の輪が広がるのではないかと思います。

—— 当日は参加できず、後で資料を読ませていただきました。関心があるのは自殺の問題だけではなく、コミュニティにとって死へのかかわりというか、スピリチュアルな部分とどう関わるかという問題です。子どもの育ちを支援している団体であっても、生まれるところへのかかわりはあっても、なかなか死はうまく扱われないことが多いですが、そのことをどのように考えたらよいのか、そんなことをうっすら思っています。

—— 父方が西本願寺のお寺の住職で、そういうところで育っているのですが、やっぱり葬式仏教と呼ばれているところから、お寺の本来の役割というのに立ち返っていくとい

うのが大事で求められているのかな、とシンポジウムをお聞きして思っていたのです。協働して何かをやっていくというのは新たな挑戦になるのかなと思いました。

—— 私自身お寺にはかかわりがまったくなかったということで、シンポジウムに参加してもNPOとの協働ということ自体がイメージがわからない状態でしたが、自死自殺という、なかなか表立って話しにくい内容を取り上げながらもお互いの領域を探りながら新しい可能性をされているというところには興味をもちました。お寺というところは私にとって縁遠かったので、これを機に、ちょっとそういったところにも興味をもっていきたいと思っています。

—— 私の市でも宗教法人が保育園と幼稚園を運営されているところがありますし、私自身も子どものお友だちのお家がお寺でした。宗派はわかりませんが、学童保育みたいなことをされていて、本堂でおやつを食べながら宿題をやって、お母さんやお父さんが帰ってくるのを待っていた、ということをおもっていたのです。私は学童の対象ではなかったのですが、行かせてもらって、放課後を過ごしていたなということをお話を聞きながら思い出しました。

シンポジウムで印象に残っているのは、なかなか自殺が原因で亡くなった方のことを話す機会がない部分をお寺とLive onの尾角さんのところが組まれて、亡くなった人のことを話す機会をつくるという話をされていたのが、すごく胸に残っていて、もう少し聞きたいなと思いました。

行政も自殺予防対策みたいなことをしていますが、市町村レベルで取り組むことの難しさ、どうしても啓発のような形で講演会をするくらいにとどまっているので、そこから

先、NPOなどと連携してできることはあるのかと思いつながらシンポジウムを聞きました。

—— 仕事は大学生の就職支援をしています。すごく感じたことは、私も家族を自殺で亡くしているという学生とかかわったことがあります。その子が、あまりそういうことを言いたがらないのですが、わかったときに、どんなふうにかかわっていったらいいのか難しいと感じたときがあります。寄り添い方というのは、もちろん答えはないのですが、いろんな形で取り組まれているというところに興味を持ちました。ぜひ、いろんなお話を聞いてみたいと思いました。

—— 興味を持って聞いていたのが、相談があったときは僧侶として特別な何かができるのかということでした。実はそれほどたくさんの方ができるわけではないけれど、仏教、宗教の地図を持っているから、自死とか、そういうテーマに対して自分を保てられるという話もあったので、そういうふうなことを思うと、仏教というものをバックボーンに持てられる僧侶は、私たちにとっては向き合いにくいナーバスな課題に対して相談なりということができるスキルをもった方なのかなと感じました。

尾角さんが、「かつてお寺は人と人をつなぐ場所だった。これからもそうであってほしい」と発言されましたが、自殺者3万人という時代の中でこそ、お寺がそういうふうな誰でも相談できる場所という形で地域に開放されるものであってほしいと改めて思いました。

—— 「チャイルドライン」という子どもの話を聞く、傾聴の活動にもかかわっています。その活動は全国70ヶ所くらいでやっていて、年間20万件くらい電話がかかってくるので

す。24 時間やっていないにもかかわらず、多くの電話がかかってくる。聞いてほしいという人たちがいっぱいいるということなのです。子どもの自死は、警察庁の統計で毎日 1.5 人だったのが、新しいデータを調べると 1.6 人になりました。こういう状況で何ができるのかを考えている日常なのですが、非常に勉強になりました。福祉のサポートも大切だとしても、NPO という、行政でない組織の人が文化的な背景も理解しながら、「土着のケア」と言っているんですが、システム化されていないケアによって、社会をもっと生きやすくできるのではないかと、お話を聞きながら思いました。

—— 数年前に友人を一人自殺で亡くして、いまして、そのときのことを思い返しながらかお話を聞いていました。その友人とは特別仲がよかったわけではなかったのですが、そういった出来事を通して、「何で自分が気づいてあげられなかったのだろう」とか、「もし、気づいていれば何ができただろう」ということを強く感じて、今も答えが出ていないのですが、なかなか日常的にこういった話題はちょっと難しいと思うので、こういった場で学びたいと思います。

山仲 浄土宗の大遠忌事務局の山仲と申します。本日は光成事務局長が共生・地域文化大賞のお話をさせていただくということで、オブザーバーとして参加させていただきました。みなさまの共生・地域文化大賞に対する思いとか、感じられたことを拝聴させていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

静永 山仲の部下の静永と申します。共生・地域文化大賞には、創設のときからかかわっており、平尾さんとずっとやってきております。浄土宗のお寺では、先ほど光成が言いま

したが、7000 のお寺が全国にあります。伝統仏教教団、全宗派のお寺をあわせると約 8 万のお寺が全国にあるという、かなり大きな団体だと思うのですが、地域の公共を担う、公共を語る上で、お寺の文脈というところで、何か新しいことができないかと挑戦しているのが、この共生・地域文化大賞です。ここで皆さんの感想などを拝聴しながら、今後の運営や今後の共生・地域文化大賞に生かせたらと思っています。よろしく願いいたします。

—— シンポジウムに参加しまして、とくに尾角さんの遺族の方に対する支援というところに興味を持ちました。というのも、私自身も母を自殺ではないですが、病死で早くに亡くしまして、そのときに抱いた思いというのは、自殺された遺族の方が抱いている思いと通じるようなところがあるとシンポジウムを聞きながら思いました。お寺とのかかわりという点では、母を亡くしてから、うちの家はちょうど浄土宗のお寺にお世話になっているのですが、法事などのお寺とのかかわりを通して、すごく心が癒されてきたというがあるので、シンポジウムを聞いてすごく有意義だと感じました。—— 私は京都市の上京区に育って、お寺はそこら中にあり、東西南北に囲まれているようななかで育ちながらもお寺にまったく興味関心が正直なかったのですが、同僚が綾部のお寺に嫁いだ人がいまして、今、まったく機能を失っているお寺なのですが、それを何とかしようがんばっているのですが、彼女と出会ったのもきっかけになって、いろいろと勉強するようになりました。秋田住職の應典院にも行かせていただいたりして、お寺に対する考え方が私の中で変わり、視野が広がったということがあります。

—— 数年NPOの活動に取り組んでいるのですが、正直NPOの活動をしながら、お寺との連携という発想は今までなかったです。自死の問題は、経済的な理由でと言いつつ、理由は孤独というところが非常に大きいと思います。NPOの活動は課題解決型ということで、自分の活動を考えたときに、なかなか救えないということを感じています。

他方、NPOの活動を行いながら、50歳から9年間、浄土宗の関係ではないのですが、四国遍路で毎年歩いていました。お寺、宿坊、お寺の境内の中で般若心経を唱えると非常にスピリチュアルなものを感じ、かつ、お説教をお聞きしていると実際にすんと落ちる部分があるんですね。ただ、個人では感じていながらNPO活動の中では自分の中で意識が出てこないというのは何なのだろうかと、先ほどから引っかかっていた。こういう活動をやっていच्छるといことが頭の片隅にありながら、縁遠い存在というのは何なのか、どのように克服していったらいいのだろうかというところを、自問自答しているところです。

—— 自死の問題は私の職場でも身近にあります。職場の中でもみんな感じていることですが、やはり、躁鬱の問題もあって、職場でどうやって向き合っていくかいろいろ考えながら仕事をやっていく。組織の中で部下をもったり、仕事を動かしながら、個人の立場や事情に配慮しながら全体として進めていかなければいけないなかで、日々いろいろ考えながら生きています。過度な競争というか、肩に力が入りすぎて生きていくと、いろいろ負のスパイラルにはいる、そういう過度な競争は回りもおおらず、競争から下りる勇気もあっていいのかと最近考えます。

—— 私自身も家族も根あかな家族で、親戚

含めて、そういう死を遂げたものが居ないという環境で約40年過ごしてきましたが、宗教的や倫理的な意味はわかりませんが、経験として、17歳から18歳まで1年間タイで過ごし、その間にのべ1ヶ月くらい尼僧として修行したことがあります。剃髪はしなかったのですが、日々お寺に入ると地域の人とのつながりができまして、お坊さんのお話を聞いたり、地域の人のお話をしていくうえで、タイという国の特殊性もあるのかもしれませんが、お寺が果たす地域での役割であるとか、村長が果たす、俗の部分の悩みを聞く役割であるとか、そういう調整と話を受け止めるお寺と村の役割を実感しておりました。

大学のときに、のべ2年間にわたり、4週間から5週間、エイズホスピスを運営しているお寺でお手伝いさせてもらった経験があるのですが、当時、タイではエイズが偏見をもって受けとめられていまして、家族と一緒にいられなくて、半ば姥捨て寺のような状態になっていまして、老若男女、下は赤ちゃんから上は70代くらいのおばあさんまで入れられているようなお寺でした。

毎日誰かが亡くなっていくのですが、必ず一人でひっそりと亡くなっていくという状態の中で、最後に清拭をしたり、火葬場もお寺にあったので、火葬までを見送るという作業をしていました。なんといったらいいのか、最期、目を閉じて魂が別の世界に旅立っていくときに一人で行くのは切ないという思いで、思考が停止するような状態でその場にいたことを記憶しています。そういう経験からいくと、誰にも話すことがなく、一人で亡くなっていくという境遇というのは、ちょっと切ない思いをしています。

シンポジウムを聞いて、自殺問題をテーマとするNPOを運営されている清水さんがお

っしかったような政策の面から自殺をなくすというアプローチは大切だと思いました。—— お盆になると父が仏壇の前でよく般若心経をよんでいました。父が5年位前に亡くなりましたので、今は役割が私に代わって、お盆になったら読むようになったのですが、読んでみると心が落ち着くような気がして、いいものだと感じています。

私は職員の研修を担当して、2000人の職員を対象にして、自殺予防の対策の研修をしました。これは広く自殺の原因や、対処法など簡単なことを研修し、今年度はもう少し対象を絞り、研修をしようと考えております。その研修でよく言われるのが、自殺を考える方がおられましたら、よく話を聞いて、専門機関へつなげといわれるのですが、専門機関といってもお医者さんとか保健士ということになると思いますが、つないだらそれで止まってしまって、それでいいのかなと今のところ疑問です。お寺とか宗教機関とかにも縁をつなぐことも必要だと思うのですが、なかなか行政は頭が固いので政教分離とかありまして、宗教機関を利用することはちょっと行政として躊躇するというところもあるかも知れません。

問題解決型の NPO

答えのない問に向きあうお寺

司会 皆さんの話を聞いていて、一般の生活の中でもっていたお寺に対するひとつのイメージがかなり固定観念化されていて、そこがあるがゆえに、お寺と NPO の協働といった発想が新鮮に思える。そこから改めて、お寺という存在を考えると、お寺のもっているもうひとつの姿というか、本来あるべき、かつてはあったらどうお寺の持っている

役割が見えてくる、垣間見えるというそういう感じが皆さんの中にあっただと思います。

さて、NPO とお寺がジョイントするといったときに、NPO に関しては社会的な問題について、あるひとつの具体的な解決を必ずしも行政や政府、政治が十分やりきれない、あるいは気がついていなかった問題についていち早くそこに察知をしながら、解決の方向をつくりだす、模索するというのが NPO の存在理由ですね。

では、お寺は何なのだ、伝統仏教はどういう存在なのかといったときに、私なりに言えば、要するに解決のない答えのない答えを、あえて言えば求めるといえるか、答えの出ない問題にもかかわらず、そこに問いを発するというのがおそらく仏教の仏教たるゆえん、ひとつの姿があるような印象を持ちました。

問いを出しても容易に答えの出ないあるいは、最終的に答えの出ない問題に向き合うのが、仏教のひとつの姿だとすれば、いち早く起きている社会的な問題を発見し、課題解決にむかう NPO と、課題があるとわかったとしても、必ずしも明快な答えを用意してない宗教者、仏教者がどういう形で連携しあうのかというのは、なかなかスリリングである。しかし、そういう関係が重要なんだということが、おそらく浄土宗の中で取り組まれているモチーフの根底にあるように思いました。

お寺の何と協働するのか

平尾 ドラッカーがお寺は元祖 NPO だといっています。お寺とわれわれ NPO は同じセクターの中にいるのです。別に協働だと声高々に言わなくても、自死自殺の問題でも、協働だといわなくても連携できるはずなん

です。同じセクターの中にいるんですから。にもかかわらず、協働がうまくできないとすれば、そこに阻害しているものが何かあると思うんです。

皆さんと議論して、意見をほしいと思うのですが、両者を阻害しているものがある。そして、共通でないものがある。お互いに協働ですのだったら、共通言語とか、共通ミッションとか、共通スキルとか、共通ツールとか、いろいろなものが必要なのですが、それがない気がします。

—— わたしのおじいちゃんがお肉大好きな僧侶でしたが、お寺はお葬式や命日に来るというイメージをもっている人が多くて、幼稚園もやっているのですが、現実には死にかかわるところばかりがお寺の役割だと思われている。でも結婚式もやっているし、普通にそのことは昔から実施されてきているのですが、毛嫌いされる方が多いです。そういう思い込みは世間一般に多いと思っています。

ただ、お寺と協働と言われていますが、お寺には檀家さんがいるじゃないですか。お寺というと僧侶だけがイメージされると思うのですが、檀家さんがあって成り立っているということも確かです。寺そのものというより、組織としての檀家さんはどうなのかというところも含めて考えていかないと私は思うのです。

キリスト教だと信者の方たちって、社会活動をそれぞれされている方がたくさんいらっしゃる。キリスト教の方たちは社会活動をされて、自分たちのNPOをつくる場所もある。寺というと建物みたいなイメージがあるけど、本当は檀家さんも社会的な機能を持っているのではないかと思うこともあります。もちろんやっているところはあるのです

が、ちょっと足りないかなと思うことがあります。

光成 お寺との協働というのは、「お寺の何と協働するのか」ということなんです。檀家さんがお寺にあって、檀家さんはお寺を維持する組織であって、こういうことをやりたいと一緒にやってくれませんか、というときに、「檀家さんがね…」という話がでてくる。確かに一面では、お寺は檀家さんでもっている。したがってお寺と協働といったとき、檀家さんの総代会や役員会に話をかけて云々ということもあるかもしれない。他方、一切なしで「いいよ」ということもあるわけです。

お寺という表現をしているのですが、代表役員の住職の感性なり意識なりで協働できるところと、まったくお断り、ということもある。NPOの方やボランティアの方が何を求めるのか。協働というスタイルの中で、場所なのか、あるいは住職のスキルなのか、どの面と協働するのかを考える必要がある。

私は遠忌800年の事務局長として勤めていますが、13年後の平成36年には浄土宗は立教開宗されて850年ですので、それにつないでいきます。私の自坊は石川県の金沢で、浄土宗宗議会議員は70人いるのです。私は議員として出てきています。内閣のようところで事務局長をやっている。これはよく言うのですが、浄土宗の中で私が議員として、浄土宗の公共政策というものを打ち出していくときに、お寺という存在を、地域での対話と交流の場として、法然上人の原点のスタイルからやり直してみませんか、個々の住職に対してアピールする。お寺という「場の力」を儀式や宗教的な使用法以外に何につかっていくのか、ということを機軸として、共生・地域文化大賞のような政策でアピールしていく。

行政とのタイアップもそうですし、NPO、ボランティア活動もそうです。浄土宗がそういう活動を通して、浄土宗というのはこういう教団なんだということを理解してもらいたい。浄土宗のお寺はこういう活動をしていて、一般の方々、ボランティアや NPO の方々と協働でこんな地域を作っている、こういう人を作っている、というものに仕上げていきたい。これが事務局長としてのつとめでもあります。実際に東京、宮城、福島に震災の後の対応策を、共生度事業のスタディケースとして展開しています。

くりかえしますが、住職のスキルと協働したいのか、それとも別のことなのか、それによってちがう。お寺というとらえ方はみな違うと思います。それを明確にして、お寺とマッチングの機会をできるだけ多くつくっていく。その間をとりもつのが NPO センターだと思います。

誤解も生じてくる

—— 私は環境 NPO をやっていますので、何かできないかといっておきながら、毎年お寺を使ってイベントをしていることを思い出しました。それくらい馴染んでいたのです。お寺での毎年のイベントでは、難民のことや自然林の問題や、沖縄やイラクのこと、原発のことなどを、お寺の境内にブースを出してやっています。コンサートや演劇や講演もしたりしながら、ただ場を借りているのではなく、住職さんが中心となって、私たちも声かけをして、毎年、実行委員会ではないですが、話し合って実施しています。

お寺でいろいろ催しをすることで、地元の人や檀家の人にお話を聞いてもらう機会になるし、住職さんとかかわることで、自分た

ちの活動の宗教的な意味というに変ですが、私はジュゴンの保護をやっているのですが、ジュゴンというのは、宗教的な意味でも大切な動物なんだということを住職さんに聞いたりしながら、もっと違う側面を知ることができたりと、お互いにいい関係がつくれています。主催のツアーに住職さんが参加されたり、私たちも住職さんの何かに参加したりという交流が持てているのです。

こういうことがなぜできるのか考えたときに、住職さんの感性というか、みんなが平和で暮らしやすい困った人がいない社会を作りたいという思いと、私たちの思いが共感しているからできていると思っています。

ただ、私たちがやっている原発や軍事基地の問題を含めると、一般社会では、政治的なこととして見られるんです。そういうときに、お寺が政治的、反政府行為をしているというようなことを新聞に書かれたんです。そうなった時に、住職さんが「非常に困る」といわれたんです。私たちとしては、「平和である社会を築きたい」というところで共感しているにもかかわらず、一般の人たちの目で引き裂かれるのはいやだと、とても思いました。

光成 最後の方でお話のあったことで言いますと、仏教界というのは封建的な社会です。行政と喧嘩するというのは悪く見られる。もちろんお寺でも行政と喧嘩することはあります。私は悪いことではないと思いますが、共生・地域文化大賞関連で大賞をとられた団体のことでも、地元の浄土宗の役員と話をしたら、あの団体は好ましくない団体ですと、大賞を渡したことを非難されたし、迷惑しているということも言われた。いっさい協働はしたくないと言われたことがありました。

その理由は何かというと、浄土宗も仏教界

の偉い人といえますか、地元の行政とかかわりが深かったり、行政との関係があったりすると、行政側との立場からみて、NPO活動をなさっている方は、行政と喧嘩しているところもあります。こういう団体の活動は、お寺にふさわしくないとか、世話の方がそんなことを言ったりして、檀家さんが「あの団体には絶対貸したらあかん」とかいうことがあります。そういう誤解、偏見からつながりができないということもありうるでしょうね。

宗教文化都市・京都ならではの

—— 宗教と行政となかなか協働は難しい側面はたしかにあります。よく考えると、京都は特殊なところで、大本山、総本山が集積していることもあって、特殊な土地柄なのかと思います。京都市の審議会に仏教界やお寺の住職さんがたくさん入っています。また、お寺のイベントなどで、法然院や西本願寺など、いろんなところで実はいっぱい協働しているなということを感じています。もうひとつ、許容量の広さみたいなものがあると思うのは、仏教という大きなくくりの中で、自分が浄土宗であっても浄土真宗のところにお参りに行くし、日本人って、クリスマスを祝ったりする国民性もある。特に京都はNPOが宗教団体と協働していくというのは非常に恵まれた環境にあって、どんどん進んでいくのではないかと。可能性が全国よりも高いのではないかと。それで言うと行政とお寺の協働もそんなに難しい話ではないのかと感じました。

光成 京都、特に京都市は浄土宗、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、日蓮宗という宗派名を嫌います。知恩院、東本願寺、西本願寺、

青蓮院という有名な観光的な価値を持つ寺院名はフリーパスです。行政のある種の知恵というのが京都にはあります。そういうところで、うまく京都は選別され、手を組んだりしています。

—— 要は京都は宗教都市なんです。だから、伝統工芸も産業も発達していった。文化も大学も発展していったというところであると、京都は宗教から始まっている…。

光成 宗教という言い方はつらいですね、宗教文化都市でしょうか。

—— ちょっと市長に言っておきますわ。宗教都市と言っていますし（笑）。

司会 さきほどのお話で、地域社会で少数派の活動をやっている人がお寺の門をくぐることによって、世俗の社会の秩序とは違ったまったく異空間、肩書きとか、社会的な上下関係を関係なく一人一人が対等平等な関係となる。つまりアジールの空間、それがお寺の空間なんだと思います。しかし、俗世間的文脈の中で言えば、やっぱり風圧が高いわけです。お寺とNPOがジョイントするためには、そういう問題をどう越えるかというのがひとつ。二つ目は、京都というのは、一面ではお寺と行政は緊張関係があったとして、宗教は文化であり、有名な、高名な寺院があるなかで、宗派を越えた交流、人的交流などもあるし、それは、京都が京都たるゆえんだと思います。

さて、それは京都だからできるのかという一面は確かに出てきます。お寺とNPOとの協働は、京都でこそ一つの典型がつくれる。しかし、日本の社会全体にとっても、重要な今日的課題でもあるということを考えておく必要がある。

光成 NPOに関しては、京都はものすごく多いですね。奈良も文化的な生育度は京都に負

けず劣らずみたいなどころがあるといいますが、NPO の活動はどうでしょうか。

—— 京都に比べると人口も少ないこともありますし、あまり、京都ほど NPO 活動はないと思います。

無関心な人とお寺の関わり方は

—— お寺と NPO の協働を考える中で、私みたい人間をどう動かすのかが一番キーワードなのかと話を聞いて思いました。私も親もまったく信仰心がない家庭で育っていますので、全国で 8 万ヶ所のお寺があると聞いても、今まで関わりがなくて生きてきたのです。それでも何とかやっているとということもありますので、お寺という場所の可能性や僧侶の思想といったものは、これからの社会問題の解決といったところでは、生きてくるのかなと思います。しかし、このテーマで表紙に飾られると、僕みたいな人間は開かない、興味ない人間は (笑)。

宗教というのは思いがあって布教活動があって、それを信仰する人によって、研鑽されていくような組織だということがあって、でも共感できない人間にとってはどうか。当然、私の中にも地域の課題を解決したいという思いがある。こんな人間をどう振り向かすか、という仕掛けが大事なのかなと思いました。

私が育ってきた環境もしくは周りの環境では、「宗教、なにそれ。NPO、なにそれ、やばい宗教か」という人がほとんどだと思うんです。たまたまここはそういう人が集まっているだけで、世間一般で言えば、僕はちょっと違うのではないかと感じています。

たぶん新興宗教の問題があると思うのですが、90 年代に私の大学時代の同級生がオ

ウム真理教の建屋の近くに住んでいました。旅館をやっていたので、甚大な被害を受けて、強盗的なこともされたりイメージがついているので、あのインパクトが残っているのかと思います。宗教なのか NPO なのかかわからないようなものがいろいろある中で、お寺と協働といわれたときに、何人の方が向くのかというのがとても疑問で、ハードルが高いのではないかと思うのです。

場としてのお寺

—— お寺は建物ではないと、否定をされていましたね。

光成 否定ではなくて、建物だけではないと。石川県の加賀温泉の大聖寺というところでは、臨済宗の廃寺があって、そこをモレシャンさんという方が別荘みたいに使って、地域の人を呼んで、そこで年に何回かイベントしたりしています。廃寺を民間の人が借りて何かやるという活動はありますよ。あちこちから怒られるかもしれませんが、箱物だけを使うということも、関係者が OK したら、どう使おうといいのではないのでしょうか。

—— そうなのでしょうが、なかなか。

光成 偏見みたいなものがあるだろうし、自己規制して「こう使わなくてはいけない」みたいなもの。それをお寺は言いましたように、旧仏教からの流れでは、伽藍という考え方ですが、でも、鎌倉以降は、真宗、お西では御坊といたりね、道場なんですね。一般の庄屋さんがもっているお寺を改修して、道場にしたり、御坊にしたりする。

葬式仏教云々といわれますが、葬式は人が集まる場所であって、布教の活動の最善のシチュエーションの場所なんです。葬式仏教といわれようが、葬式は大変意味があるもの

です。それから、結婚式もやります、仏式の。だれでも来て、挙式の様子を見られるというので、大変評判もいいのです。寺院側にとって、人が集まる機会というのは、教化、お説教、あるいは教えを説くといういいチャンスなんです。それが今、人がなかなかすんなり入っていけない状況をつくってしまっているのは仏教者、お寺側の過ちだと思っています。

金沢の自坊で、今年、4回目になりますが9月18日にアコースティックジャンボリー、フォークソング大会をやります。朝、10時半ごろより、去年はちょっと遅すぎで、9時過ぎまでフォーク、アコースティックで機材も大きいものががんがんやりだしたもので、去年は苦情が来ました(笑)。今年は10時半から6時という限定でアコースティックギターでエレキは入れないと言ってやります。怒ってこない人もいますが。

そういう規制というのは両方ともに思いがあるんだろうけれど、やはり仏教にタブーはないのです。本堂をどう使おうと、仏さんにお尻を向けてやろうと関係ない。それをして、人が集まって、そこから縁が結ばれていて、そして、機になる。

NPOでも婚活をお寺でやらしてほしいというのがある。NPOの活動でも、お寺を貸してほしい、使わしてほしいとおっしゃるんだけど、どういう使い方をしたいのか、どういった協力をしてほしいとか、そういう提案がないんですね。

平尾 さっきの共生・地域文化大賞を受賞された団体は、隠す必要がないと思いますが、認定NPO法人の北九州ホームレス支援機構です。福岡市とホームレス支援の政策のことで対立があって、行政はあの人たちのことを嫌っているわけです。けども、認定NPO

法人なんです。認定をとっているということは、明らかに宗教団体との違いを分離して認定されているはずなんです。理事長は現役の牧師さんですし、常務理事も元牧師さん。ボランティアもキリスト教関係の人が多い。そういう実態がある。そこに第3回の共生・地域文化大賞をとっていただいている。浄土宗としてはキリスト教系の団体であっても、大賞をとっていただいた。

—— そういう姿を、もっと見せていくことが大事なのではないですか。NGOはあらゆる宗教から支援を得て、いっぱいあったら何も恐れることはないし、その代わり、代表者は宗教について正しく知っていることは大事だと思います。

光成 浄土宗寺院とNPOの協働というものを、宗教活動と捉えられることは心外だし、そういうつもりはありません。振り向かして、われわれ浄土宗の信者にすることも毛頭ありません。来たくなければ来なくてもいいし、振り向いてもらわなくても結構なんです。ボランティア・NPO活動の中で、お寺という建物、宗派が表にでなくても、そこでひとりでも困っている人を助けてあげる、手助けをしているならば、その活動を支援するという、そういう共生・地域文化大賞だと思っています。

人と人とのつながりから生まれる活動

光成 結局、人と人とのつながりが、コミュニケーションなりネットを作ったり、空間を生み出したりということになるんだろうと思います。最終的にはなにかというと、人と人とのつながりなんでしょうね。地震の対応にしても、自死自殺の防止にしても、1対1のつながりですね。若者の雇用問題にからめ

て、パーソナルサポートを進めていこうというときに、東日本大震災が起こってとん挫してしまっただけですが、北九州ホームレス支援機構のようなものを浄土宗で勉強してやっていこうという話があったのですが、前に進んでおりません。

—— 私はもうすぐ 50 歳になるのですが、小さいときに、食べていくということに関して、働かざるもの食うべからずみたいなことで育ってきました。これは批判ではありませんが、坊主丸儲けとかいうことを言われますが、そういうなかで、雇用を創出するとか、そういう観点で、とくにこの大学に来てから思うのですが、NPO の方は自らエネルギーを持って、創意工夫をして、マネジメント能力がすごく高い方ばかりだと思っています。そういう力を持っておられる方がいて、雇用の創出とか、そういうことに関して、連携してもらえらるともっといい社会になるのではないのかなど。

光成 いいんじゃないですかね。

まず一緒にやることからスタート

—— 私も持っているイメージでは、法事的时候に説教とか、布教活動、それ自体はいいと思うのですが、先ほども同じように場の提供をするときに、NPO の人間からすると、何のために、どういうことだと説明した上でないとそれが利用できないような形というのは、それだったら他へ行ってしまったほうが…。

希望なんですけど、自由に使ってほしいと開放、提供してほしいなど。私は東京出身で田舎は長野県なんですけど、東京の場合のお寺は父が亡くなったときにどこの檀家か関係なしに、さて、宗派、近所はどこだろうとその

場で探すような感じ。ですから、お寺さんといったら、僧侶お一人のイメージしかないんですが、お寺を訪ねたら、いや檀家総代さんのところにいってくださいと、組織になっていた。田舎では、何か活動をしようとする、NPO みたいなところと自分のお寺かかわったらずいんじゃないのということもあります。とにかく、そんなハードルを考えると、いろんな目的があっても一歩踏み入れるというのは、NPO からするとちょっとハードルが高い。最初にどんな協働ができるだろうか、という議論ではなくて、自由にどんな活動でもいいからということで入ってもらって、そのなかで初めて顔が見えるような形で知り合って、コミュニケーションをとって、知り合ったらいいやん、と。

光成 それでいいと思うんです。その場、使用規則みたいなのを考えてやるのではなくて、おっしゃったように、住職とか僧侶は感性やスキルがあって、お寺がどんな場になるかということなので、その住職なり、世話役、檀家さんその人たちが NPO の活動に参画するとかスポンサー的なことをするということはいいって、お寺がそのような場になっていくのが一番理想でしょう。

—— さっきおっしゃいましたがコンサートでもなんでもいいと。

光成 住職がいちばんのポイントでしょうね。先ほどいった、共生度という、お寺を本堂をそのような場にしていこうというところにいこうというのが、われわれ宗派としての情報。NPO は全国に中間支援センターもありますから、そういうところと協働して、縁を結んでいって、お寺で NPO 活動ができる。場所を貸すというのではなく、一緒にこれからやっていきましょうという話です。

司会 そろそろ時間がきましたが、どなたか

発言がございますか。

——お寺とNPOがジョイントするときに、NPOは具体的な課題の解決、お寺は解決できない課題に対してアプローチしていくと司会の先生がおっしゃっていました。死んだらどうなるかという問題をあえて出しますが、死んだらと言われたときにどう答えますか。浄土宗では、教えがあるんです。死んだら次に極楽浄土にお浄土に生まれると、教えがあるのですが、これを堂々という。これは信仰ですよね。じゃあ、信仰心がないとおっしゃっていましたが、自死自殺がいたとする、自死遺族の方から、「お父さん、自殺して死んでしまった。死んでどうなったんだ」ということを、たとえば聞かれたときに、「わかりません」、「人間が死んだら何もない」というのもひとつありますよね。無というのもひとつの信仰なんでしょうが、浄土宗のお坊さんだったら、極楽にきちんと往生、生まれていますと言います。実際問題はわかりませんよ。確認していませんから。でも、堂々とそれを信じて、それを言うことで、救われる自死遺族の方もいらっしゃる。そこにお寺という場のもつ力、あるいは僧侶の信の姿があって、それが尾形さんがなさっているグリーン・ケア、つまり大切な人を失って残された人の心に生じる悲しみやグリーフ（悲嘆）を受け止め、支援する活動と共鳴していくのではないかと思います。

司会 いい発言がでたところで時間が来ました。この辺で終わりますが、今日は触れませんでした。他力本願という言葉がありますね。他力本願というのは身を任せる、お任せをするということですが、しかし、これはまったく消極的な態度ではなくて、きわめて積極的な態度だということですね。おそらくこれが、素人判断ですが、法然、親鸞の一番の核になるのだらうと思います。他力本願、逆に言えば、人と人とのつながりの中に、自らの身を預け、その関係の中で自分の生き方を作っていく、それはお互いにそうだという空間だと思います。

今日は、浄土宗の「共生・地域文化大賞」という試みを通して、お寺とNPOが協働する意味を考えてきました。なぜ地域文化大賞なのか。その発想の底には、お寺がもつ潜在的な力を引き出せば、今日の自閉した社会を開こうとする人々とつながる何かが見えてくるのではないかと。そういう思いをもって、光成範道・法然上人800大遠忌事務局長と平尾剛之さんをお招きして、一緒に議論してきました。何か明快な答えがでたというわけはありませんが、皆さんのなかに、これまで抱かれていたお寺のイメージとはちがう、可能性を秘めたお寺のイメージを感じとられたとすれば幸いです。長時間ありがとうございました。

[2011年7月21日討論]